3才未満の子どもをもつ母親の育児への家族内・外からの支援の実態と意向

Internal and external social support forthe family among mothers with under 3 year old children in Tokyo

(分担研究：民間活動の活性化に関する研究)

研究協力者：山崎喜比古* (Yoshihiko Yamazaki, Ph. D)

要　約　3才未満の子供を有する東京都内の家庭での夫の育児・家事分担割合は小さいが、母親が就労していない場合でも、過半数の母親は夫からの現状以上のサポートを希望していた。育児仲間からの情報的及び情緒的サポートを現に受けているか、もしくは希望するという母親は9割以上に上り、育児仲間への期待は極めて強かった。母親が必要を強く感じている社会的サービスと施策には、夜間診療サービスや緊急時の保育サービスとともに、住宅事情と職場の条件や雰囲気の改善があった。

見出し語　育児　母親　期待と意向　夫からのサポート　家族外からのサポート　支援的環境

はじめに

現在育児を行う社会環境は、都市化や核家族化が進行する中徐々に変化しており、密室化や外部化等も指摘されている。このような社会の中で、育児期の母親が抱いている家族内外からの支援への期待や意向は変化していると考えられるが、現時点では十分に把握されていない。そのため今後の母子保健サービスをのあり方を考える上での基礎資料とすることを目的とし、調査を実施した。

今回は、一般に育児の密室化、孤立化が進行しているとされている大都市部において調査を実施し、検討した。

研究方法

東京都の中でも都市部にある江東区に在住の3才未満の子どもをもつ母親400名を対象とし（住民基本台帳より二段階無作為抽出）、独自に作成した調査票を用いて、配票留め置き法で実施した。

研究結果および考察

332名より回答が得られ、回収率は83.0%であった。

属性では、対象者の平均年齢は31.4(標準偏差±4.6)才、就業をもっているのは24.1%（73名、育児休暇中7名を含む）、専業主婦が75.0%（249名）であった。対象者の夫は、仕事のため家庭に不在になる時間の平均12.7（±2.0）時間であり、夫婦とその子供だ

東京大学医学部保健社会学教室・助教授
*

けの核家族は84.6%を占めた。

(1)夫からのサポート

家族の中でも、特に母親に対する夫からの支援に注目し、夫婦内での夫の育児・家事の担当分の比較を行った。育児4項目（食事の世話、お風呂に入れる、遊び・あやす、保育施設等への送り迎え）、家事5項目（掃除、洗濯、日用品・食品の買い物、食事の準備、食事の後片づけ)の夫の分担の平均は、12.7%であった（図1、2）。夫の分担割合は、夫の仕事時間が長いほど少なく、対象者が専業主婦よりも就業している場合、さらにはパートタイムよりはフルタイム勤務の場合に、夫の分担割合が高くなる傾向がみられた。

現状の夫の育児・家事分担に対して母親は、もっと育児を協力をしてほしい、家事を協力をしてほしい、育児や家事に対する励ましや気遣いをしてほしいと、それぞれ 64.7%、52.7%、64.3%の期待をしていた。特に分担割合が低い場合にそれらを強く期待する傾向がみられた。また、夫の分担割合が高いほど、分担に対してとても助かったと感じたり、満足感を強く感じていた。

(2)家族外からのサポート

支援を提供する側（支援源）として、家族と家族外の知人、公的機関ほかをあげ、支援源別に、以上の3種の支援について、その支援を受けているか、受けていない場合は希望の有無について、回答を求めた。

「子どもの健康状態やしつけに関して分からないことを聞く」という情報的支援においては、育児仲間、夫、親戚を過半数が支援源と挙げていた。公的な専門機関である保健所、医療機関にはおよそ4割が支援源としているのに加え、受けていないが現在は得ていないが今後希望する割合が4割程度みられていた。

「子どもを預けなくてはいけない時、預かってもらう」という手段的支援は夫、同居家族、親戚を過半数が支援源としてあげ、そのほか家族外の支援は、いずれも1割程度に過ぎなかった。現在は受けていないが保育所や民間の育児施設に対しては現在は受けていないが希望する者は、4割以上であった。

「気がねなく愚痴や気掛かりなことを聞いてもらう」という情緒的支援は、夫、育児仲間に対して9割を越える人が、支援源としてあげていた。

育児期の母親達は、特徴的な支援源として情報的支援には専門機関、手段的支援には家族・親戚、情緒的支援には育児仲間などをあげており、希望もしていた。種々の社会状況を考え会わせると、これらの支援を受けられない場合も考えられ、現状を踏まえた保健サービスの充実が望まれていると考えられる。

(3)社会的サービスや施策への期待

育児を支援するものとして、健診が土日に受けられるシステム、長時間預けられる保育サービスなど11項目をあげ、どの程度必要と感じているかについて回答を求めた。その結果、生活に身近な課題と考えられる夜間診療や緊急時の保育サービスへの期待、また働く母親に柔軟な職場雰囲気づくり、父親が定時帰宅できる職場への期待が、大多数の母親が「とても必要」と指摘していた。育児仲間や自主的子育てグループに関する情報提供は、今回の母親の意向では「とても必要」とする者は約35%と多くはなかった。

今後の保健サービスの検討には、これらの希望を考慮する必要があると考える。

図1　　夫の育児分担割合

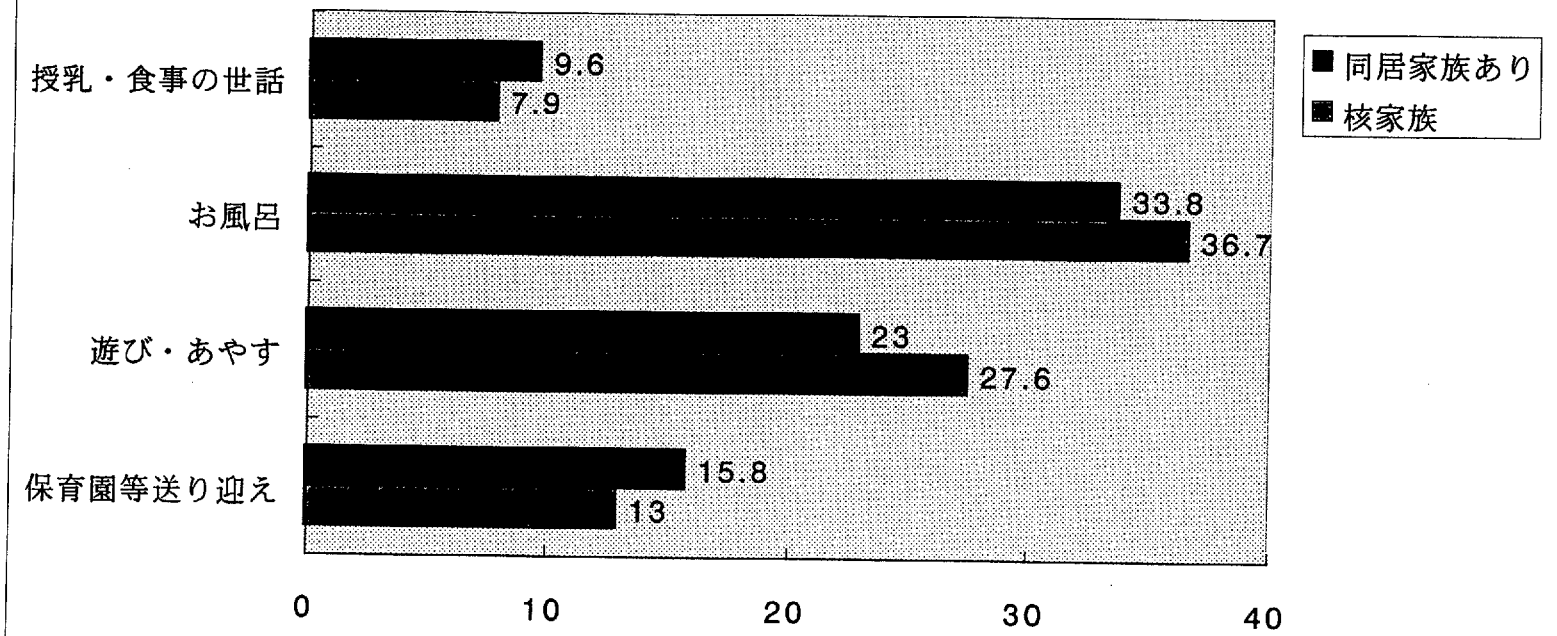

授乳・食事の世話
お風呂
遊び・あやす
保育園等送り迎え
9.6
7.9
33.8
36.7
23
27.6
15.8
13
0
10
20
30
40
同居家族あり
核家族

図2　夫の家事分担割合

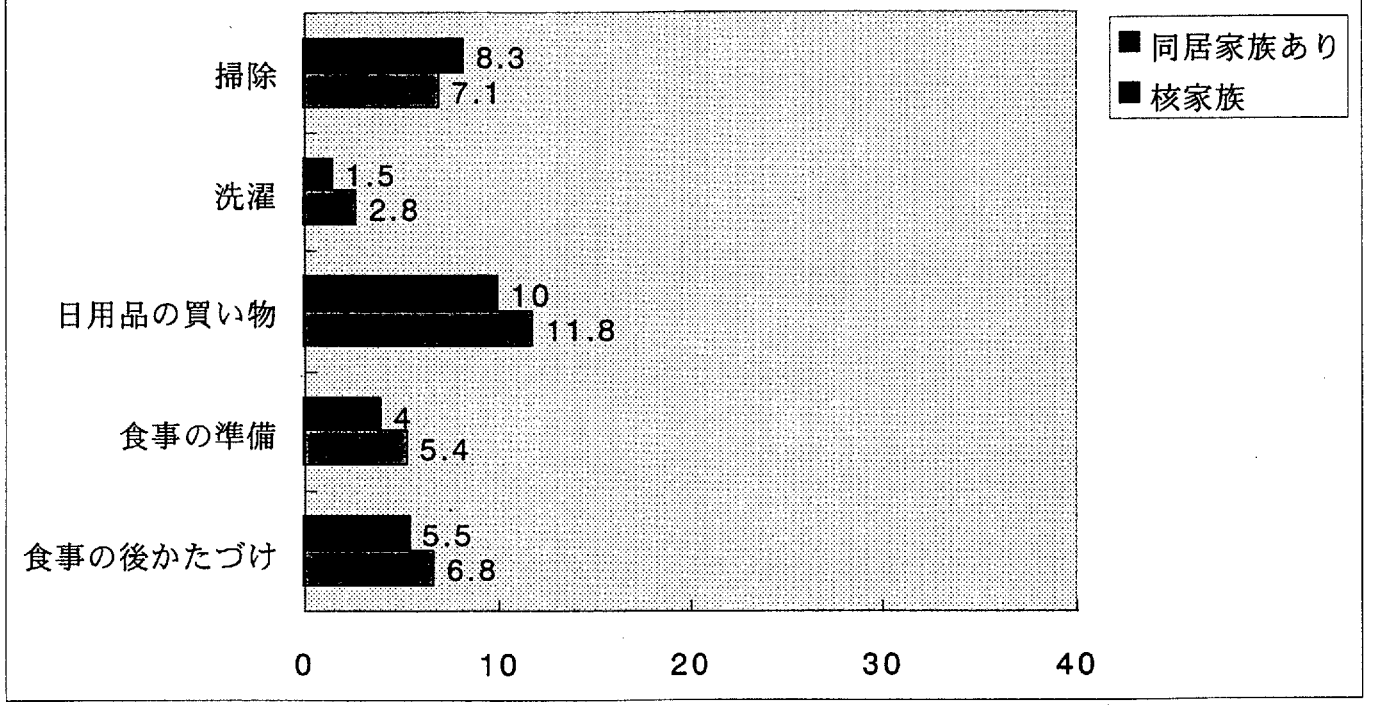
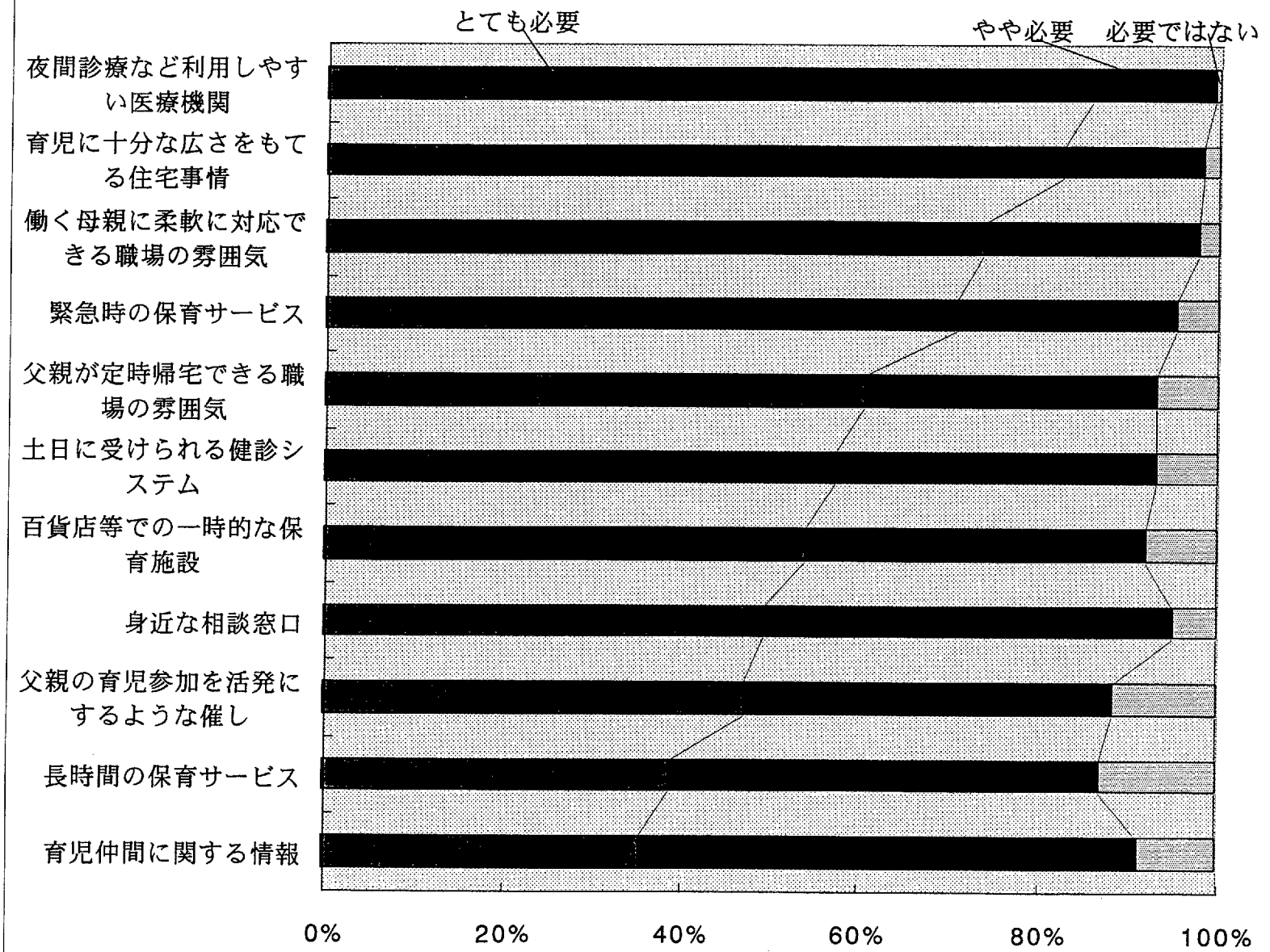

掃除
8.3
7.1
洗濯
1.5
2.8
日用品の買い物
10
11.8
食事の準備
4
5.4
食事の後かたづけ
5.5
6.8
0
10
20
30
40
同居家族あり
核家族

図3　　支援的社会環境


とても必要
やや必要
必要ではない
夜間診療など利用しやすい医療機関
育児に十分な広さをもてる住宅事情
働く母親に柔軟に対応できる職場の雰囲気
緊急時の保育サービス
父親が定時帰宅できる職場の雰囲気
土日に受けられる健診システム
百貨店等での一時的な保育施設
身近な相談窓口
父親の育児参加を活発にするような催し
長時間の保育サービス
育児仲間に関する情報
0%
20%
40%
60%
80%
100%

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要 約　3才未満の子供を有する東京都内の家庭での夫の育児・家事分担割合は小さいが、母親が就労していない場合でも、過半数の母親は夫からの現状以上のサポートを希望していた。育児仲間からの情報的及び情緒的サポートを現に受けているか、もしくは希望するという母親は9割以上に上り、育児仲間への期待は極めて強かった。母親が必要を強く感じている社会的サービスと施策には、夜間診療サービスや緊急時の保育サービスとともに、住宅事情と職場の条件や雰囲気の改善があった。